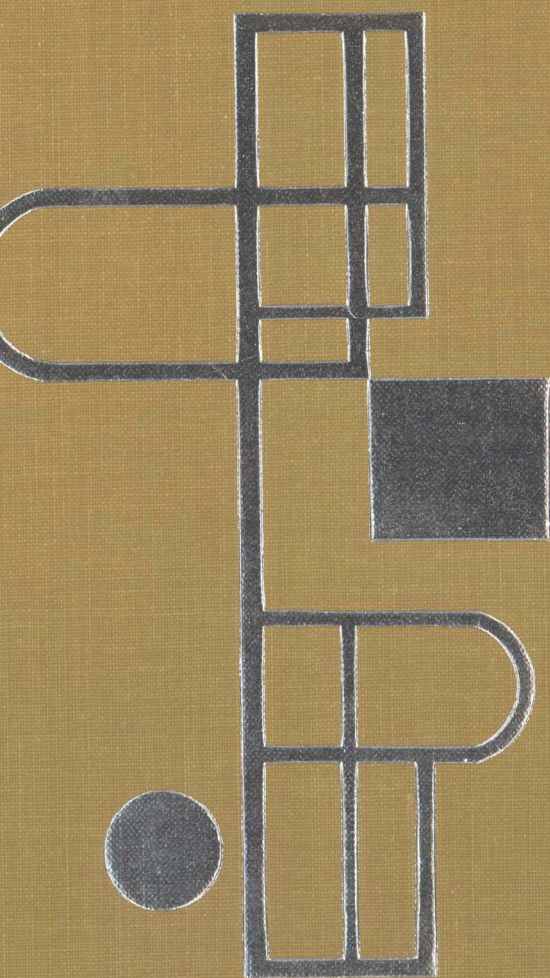


尾崎紅葉 廣津柳浪
山田美妙 川上眉山
集



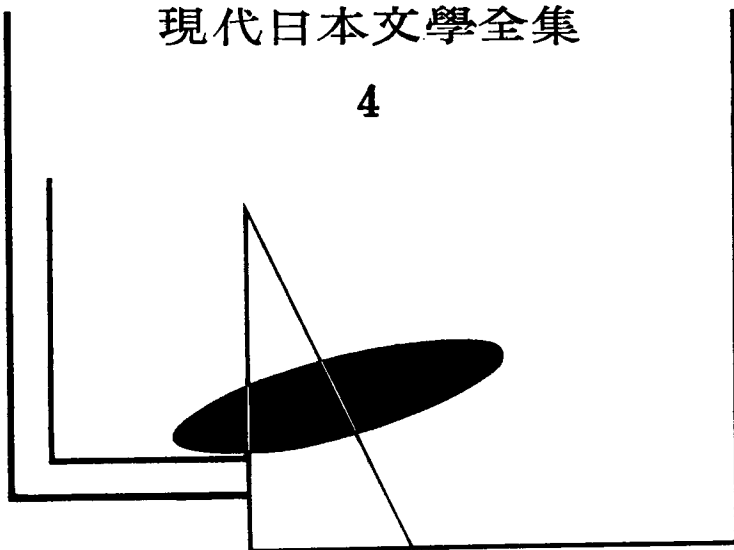
現代日本文學全集



葉妙浪山
紅美柳眉
崎田津上
尾山廣川
集

定本限定版
現代日本文學全集

4



筑摩書房版

葉 紅 崎 尾
妙 美 田 山
浪 柳 津 廣
集 眉 上 川

昭和四十二年十一月二十日 發行

著 者

尾 崎 山 廣 川
崎 田 津 上
紅 美 柳 眉
葉 妙 浪 山

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
竹之内 靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話 東京 四一五二
印刷 多田印刷株式會社
製本 山見製本株式會社

尾崎紅葉集 目次

金色夜叉……………五

二人色懺悔……………一六三
比丘尼

拈華微笑……………一八〇

心の闇……………一八五

青葡萄……………二〇六

山田美妙集 目次

武藏野……………二三五

蝴蝶……………二四三

廣津柳浪集 目次

變目傳……………二五三

黑蜴蛭……………二八一

今戸心中……………二九二

淺瀬の波……………三二五

雨……………三三四

川上眉山集 目次

書記官	三五
うらおもて	三六
ふところ日記	三七
尾崎紅葉（正宗白鳥）	三八
美妙齋美妙（内田魯庵）	三九
廣津柳浪（岩城準太郎）	四〇
川上眉山（岩城準太郎）	四一
解説	四二
年譜	四三

装幀 恩地孝四郎

尾崎紅葉集

金色夜叉

前編

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬ三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き腸は断れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を讀して、此黄昏より風は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優しき聲の有むる者無きより、憤をも増したるやうに飾竹を吹靡けつゝ、乾びたる葉を粗なげに鳴して、吼えては走行き、狂ひては引返し、揉みに揉んで獨り

散々に騒げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を顯して、鋭く冴えたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとすなり。人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際地の始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に遊く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、酔ひ、戯れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし子子の形を斂めて、今將何處に如何にして在るかを疑はざらんとするも難からずや。多時靜なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、搖々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を撞に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立て、心地悪き微温の四方に溢るゝと與に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭へる綱引の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、避くべき道無くて其中を駆抜けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に聲して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり、「もう湯は抜けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の低く答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり。紳士は二重外套の袖を袖と攝合せて、縞の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き／＼て車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、刻竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は打叩きて、「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんとせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつゝ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てゝ人は出で來ぬ。

圓窗に結ひたる四十約の小さく瘦せて色白き女の、茶微塵の絲織の小袖に黒の奉書袖の紋付の羽織着たるは、此家の内儀なるべし、彼の忙しげに格子を啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充滿たる履物の杖を立つべき地さへあらざるに遅へるを、彼は虚さず勤篤に下立ちて、此の敬ふべき賓の爲に辛くも一條の道を開けり。恁て紳士の脱捨てし駒下駄のみは獨り障子の内に取入れられたり。

(一)の二

箕輪の奥は十疊の客間と八疊の間とを打

抜きて、廣間の十個處に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顔も眩しまでに耀き遍れり。三十人に餘ぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌舞多遊を爲るなりけり。蠟燭の燄と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の内を、蔑の煙と燈火の油煙とは互に纏れて渦卷きつゝ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤くなりて、白粉の薄剥けたるあり、髪は解れたるあり、衣の亂次く着類れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取亂したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帶の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。然しも息苦しさ溫氣も、咽ばさるゝ煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く聲笑類るゝ聲、振合ひ、踏破く荷き、一齊に揚ぐる響動など、絶間無き騒動の中に狼藉として戯れ遊ぶ爲體は、三綱五常も絲瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打獲したるばかりなり。

海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎮りて、船は九死を出づべしとよ。今此の如何と爲べからざる亂脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和きて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつゝも畏を懷けり。中の間なる團樂の柱

側に座を占めて、重げに戴ける夜會結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騒ぐを興あるやうに涼き目を瞪りて、躬は淑かに引續へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を賣るものゝ假の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。娘も數多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の戸惑せるかと覺しきもあれど、中には二十人並、五十人並優れたるもありき。服裝は宮より數等立派なるは數多あり。彼は其點にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、其起肩に紋御召の三枚襷を被ぎて、帶は紫根の七絲に百合の折枝を鍍金の盛上にしたる、人々之が爲に目も眩れ、心も消えて眉を皺めぬ。此外種々色々の絢爛なる中に立交らひては、宮の裝は纔に曉の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何なる美しき染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗はしき織物よりも文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとも其の醜きを蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しき害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手爐を圍みて、蜜柑を剥きつゝ語ふ男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入りたりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！ 馬士にも衣裳と謂

ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだもの、着物などは如何でも可い、實は何も着て居らんでも可い。」

「裸體なら猶結構だ！」

此の強き合槌撃つは、美術學校の學生なり。綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入來りつ。其後には、今まで居間に潜みたりし主の箕輪亮輔も附添ひたり。席上は入亂れて、爰を先途と激しき勝負の最中なれば、彼等の來れるに心着きしは稀なりけれど、片隅に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。廣間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の小き内儀の口は柑の爲に引歪みて、其夫の額際より赫亮けたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色は玉のやうなるに頬の邊には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、腮は左右に蔓りて、面積の廣き顔は稍正方形を成せり。緩く波打てる髪を左の小髻より一文字に撫付けて、少しは油を塗りたり。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、五紋の黒羅襪の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六寸の七絲帶に金鏈子を垂れつゝ、大様に面を擧げて座中を酌したる容は、實に光を發つらんやうに四邊を拂ひて見えぬ。此團樂の中に彼の

如く色白く、身奇麗に、而も美々しく装ひたるはあらざるなり。

「何だ、彼は？」

例の二人の一個は然も憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くやうに言ひて學生は故と面を背けつ。

「お俊や、一寸。」と内儀は群衆の中より其娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴へるを見るより、慌忙しく起ちて來れるが、顔好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結びて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚しなり。顔を凝めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ。」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士は然して好ましからぬやうに頷けり。母は歪める口を怪しげに動かして、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ。」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目禮せり。

「さあ、まあ、被入いまし。」

主の勧むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其處まで介添に附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを訝りて、彼の行くより座るまで一舉一動も見脱さざりけり。其の行く時彼の姿は恰も左の半面を見せて、團圓の間を過ぎたりしが、無名指

に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添ひて、殆ど正しく見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿めたるなり。お俊は骨牌の席に復へると倅しく、密に隣の娘の膝を衝きて口早に囁きぬ。彼は忙

忙しく顔を擡げて紳士の方を見たりしが、其人よりは其指に耀く物の異常なるに駭かされたる體にて、

「まあ、那の指環は！一寸、金剛石？」

「然うよ。」

「大きいのねえ。」

「三百圓だつて。」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の竊立つを覺えつゝ、

「まあ！ 好いのねえ。」

鯉の目ほどの眞珠を附けたる指環をだに、此幾歳か念懸くれども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮てて攻鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電光の如く隣より伸來れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引撥へば、

「あら、貴方如何したのよ。」

お俊は苟立ちて彼の横膝を續けさまに拊きぬ。

「可くつてよ、可くつてよ、以來もう可くつてよ。」

彼は始めて空想の夢を覺して、及ばざる身の分を諦めたりけれども、一旦金剛石の強き光に

燒かれたる心は幾分の知覺を失ひけんやうにて、然しも目覺しかりける手腕の程も見ると漸く四途亂になりて、彼は敢無くも此時よりお俊の爲に頼み難き味方となれり。

恚して彼より此に傳へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那が金剛石？」

「見給へ、金剛石。」

「あら、まあ金剛石??」

「可感い金剛石。」

「可恐い光るのね、金剛石。」

「三百圓の金剛石。」

瞬く間に三十餘人は相呼び相應じて紳士の富を謳へり。

彼は人々の更互におのれの方を眺むるを見て、其手に形好く葉巻を持たせて、右手を袖口に差入れ、少し懈げに床柱に靠れて、目鏡の下より下界を見遍すらんやうに目配して居たり。

恚る目印ある人の名は誰しも問はであるべきにあらず、洩れしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とて、一代分限ながら下谷區に聞ゆる資産家の家督なり。同じ區なる富山銀行は其父の私設する所にして、市會議員の中にも富山重平の名は見出さるべし。

富山の名の男の方に持囃さるゝ如く、富山と知

れたる彼の名は直に女の口々に誦ぜられぬ。あはれ一度は此紳士と組みて、世に愛たき寶石に咫尺するの榮を得ばや、と彼等の心々に冀はざるは希なりき。人若し彼に咫尺するの榮を得ば、宵に其の目の類無く樂さるゝのみならず、其の鼻までも薫花の多く敷くべからざる異香に薫ぜらるゝの幸を受くべきなり。

男たちは自から荒められて、女の舉りて金剛石に心奪さるゝ氣色なるを、或は妬く、或は淺ましき、多少の興を冷さるゝはあらざりけり。獨り宮のみは懸ける體も無くて、其の清しき眼色は然しもの金剛石と光を争はんやうに、用意深く、心様も幽しく振舞へるを、崇拜者は益々權びて、我等の慕ひ參らする効はあるよ、偏に此君を奉じて孤忠を全うし、美と富との勝負を唯一戰に決して、紳士の憎き面の皮を引剥かん」と手薬煉引いて待ちかけたり。然れば宮と富山との勢は恰も日月を並懸けたるやうなり。宮は誰と組み、富山は誰と組むらんとは、人々の最も懸念する所なりけるが、圖の結果は驚くべき豫想外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人と與に一組になりぬ。始め二つに輪作りし人数は此時合併して一の大きな團樂に成されたなり。而も富山と宮とは隣合に坐りければ、夜と晝との一時に來にけんやうに皆狼狽騒ぎで、忽ち其隣に自ら社會黨と稱ふる一組を出せり。彼等の主義は不平にして、其目的は破壊なり。則ち彼等は専ら腕力を用ゐて或組の果報と安寧とを妨害せんと爲るなり。又其前面には一人の

女に内を守らしめて、屈竟の男四人左右に遠征軍を組織し、左翼を狼藉組と稱し、右翼を蹂躪隊と稱するも、實は金剛石の鼻柱を挫かんと大童になれるに外ならざるなり。果せる哉、件の組は此勝負に達き大敗を取りて、人も無げなる紳士も有繋に鼻白み、美しき人は顔を赧めて、座にも堪ふべからざるばかりの面皮を缺かれたり。此の一番にて紳士の姿は不知見えたりぬ。男たちは萬歳を唱へけれども、女の中には掌の玉を失へる心地したるも多かりき。散々に破壊され、狼藉され、蹂躪されし富山は、餘りに這文明的ならざる遊戲に怖をなして、密に主の居間に逃歸れるなりけり。

鬻を被たるやうに梳りたりし彼の髪は棕櫚箒の如く亂れて、環の隻挽けたる羽織の紐は、手長猿の月を捉へんとする狀して搖曳と垂れり。主は見るより然も慌てたる顔して、「どう遊ばしました。お、お手から血が出て居ります。」

彼は矢筈に煙管を捨て、忽にすべからざらんやうに急遽と身を起せり。

「あゝ、酷い目に遭つた。どうも那樣亂暴ちや爲様が無い、火事装束でも出掛けなくつちや油も立切れないよ。馬鹿にしてゐる、頭を二つばかり撲れた。」

手の甲の血を吮ひつゝ富山は不快なる面色して設の席に着きぬ。豫て用意したれば、海老茶の紋縮緬の裾の傍に七寶燒の小判形の大手爐を置きて、蒔繪の吸物膳をさへ据ゑたるなり。主

は手を打鳴して婢を呼び、大急に銚子と料理とを誂へて、

「それは如何も飛でもない事を。外に何處もお怪我はございませんでしたか。」

「那樣に有られて耐るものかね。」

爲う事無きに主も苦笑せり。

「唯今絆創膏を差上げます。何しろ皆書生でございますから随分亂暴でございます。故々御招き申しまして甚だ恐入りました。もう彼地へは御出陣にならんが宜うございます。何もございせんが此で何卒御寛り。」

「所が最一遍行つて見やうかと思ふの。」

「へえ、又被入りますか。」

物は言はで打笑める富山の腮は愈々展れり。早くも其意を得てや破顔せる主の目は、薄の切疵の如く幾と有か無かになりぬ。

「では御意に召したのが、へえ。」

富山は益々笑を湛へたり。

「ございましたらう、然うでございませうと。」

「何故な。」

「何故も無いものでございます。十目の見る所ぢやございせんか。」

富山は頷きつゝ、

「然うだらうね。」

「彼は宜うございませう。」

「一寸好いね。」

「まづ其の御意でお熱い所をお一考、不滿意の貴方が一寸好いと有仰る位では、餘程尤物と思

「はなければなりません、全く暮うございます。」
倉皇入來れる内儀は思ひも懸けず富山を見て、
「おや、此方にお在あそばしたのでございますか。」

彼は先の程より臺所に詰切りて、中入の食物の指圖などして居たるなりき。

「酷く負けて逃げて來ました。」

「それは好く逃げて被入いました。」

例の歪める口を窄めて内儀は空々しく笑ひしが、忽ち彼の羽織の紐の偏斷れたるを見尤めて、環の失せたりと知るより、慌て驚きて起たんとせり、如何にとなれば其環は純金製のものなればなり。富山は事も無げに、
「何爲、宜い。」

「宜いではございません。純金では大變でございます。」

「何爲、可いと言ふのに。」と聞きも訖らで彼は廣間の方へ出で、行けり。

「時に彼の身分は如何かね。」

「然やう、悪い事は御座いせんが……。」

「が、如何したのさ。」

「が、大した事はございませんです。」

「それは然うだらう。然し凡そ甚麼ものかね。」

「舊は農商務省に勤めて居りましたが、唯今では地所や家作などで暮して居るやうでございす。如何か小金も有るやうな話で、鳴澤隆三と申して、直隣町に居りまするが、極手堅く小體に遣つて居るのでございます。」

「はあ、知れたもんだね。」

我は顔に頰を搔撫すれば、例の金剛石は燦然と光れり。

「それでも可いさ。然し嫁れやうか、嗣子ぢやないかい。」

「然やう、一人娘のやうに思ひましたが。」

「それぢや窮るぢやないか。」

「私は悉い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうで。」

程無く内儀は環を搜得て歸來にけるが、誰が悪戯とも知らで耳搔の如く引展されたり。主は彼に向ひて宮の家内の様子を訊ねけるに、知れる一遍は語りけれど、娘は猶能く知るらんを、後に招きて聴くべしとて、夫婦は頻に觸を侑めけり。

富山唯繼の今宵此に來りしは、年賀にあらず、骨牌遊にあらず、娘の多く聚れるを機として、嫁選せんとてなり。彼は一昨年の冬英吉利より歸朝するや否や、八方に手分して嫁を求めけれども、器量望の太甚しければ、二十餘件の縁談皆意に稱はで、今日が日までも仍其事に斷斷して已まざるなり。當時取急ぎて普請せし芝の新宅は、未だ人の住着かざるに、はや日に黒み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

第二章

骨牌の會は十二時に迫りて終りぬ。十時頃より

り一人起ち、二人起ちて、見る間に人數の三分の一強を失ひけれども、猶飽かて残れるものは景氣好く勝負を續けたり。富山の姿を隠したりと知らざる者は、彼敗走して歸りしならんと想へり。宮は會の終まで居たり。彼若疾く還りたらんには、恐く踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顔に富山は主と語合へり。

彼に心を寄せし輩は皆彼が夜深の歸途の程を氣遣ひて、我願くは何處までも送らんと、絶か念ひに念ひけれど、彼等の親切は無用にも、お宮の歸る時一人の男附添ひたり。其人は高等中學の制服を着たる二十四五の學生なり。金剛石に並いでは彼の舉動の目指れしは、座中に宮と惡意に見えたるは彼一人なりければなり。此の一事の外は人目を牽くべき點も無く、彼は多く語らず、又は躁がず、始終慎しくして居たり。終まで此兩個の同伴なりとは露顯せざりき。然あらんには餘所々々しさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門を出づるを見て、始めて失望せしもの寡がらず。宮は鳩羽鼠の頭巾を被りて、濃淺黃地に白く中形模様ある毛織のシオールを絡ひ、學生は焦茶の外套を着たるが、身を窄めて吹來る風を遣過しつゝ、遅れし宮の迎着くを待ちて言出せり。

「宮さん、那の金剛石の指環を窄めて居た奴は如何だい、可厭に氣取つた奴ぢやないかい。」

「然うねえ、だけれど家が彼人を目の敵にして亂暴するので氣の毒だつたわ。隣合つて居たもんだから私まで酷い目に遭されてよ。」

「うむ、彼奴が傲慢な顔をしてゐるからさ。實は僕も横腹を二つばかり突いて遣つた。」

「まあ、酷いのね。」

「那云ふ奴は男の目から見ると反吐が出るやうだけれど、女には如何だらうね、那奴のが女の氣に入るのぢやないか。」

「私は可厭だわ。」

「芬々と香水の匂がして、金剛石の金の指環を穿めて、殿様然たる服裝をして、好みに違無しさ。」

學生は嘲むが如く笑へり。

「私は可厭よ。」

「可厭なものが組になるものか。」

「組は鬨だから爲方が無いわ。」

「鬨だけれど、組に成つて可厭さうな様子も見えなかつたもの。」

「那樣無理な事を言つて！」

「三百圓の金剛石ぢや到底僕等の及ぶ所にあらずだ。」

「知らない！」

宮はシオールを揺上げて鼻の半まで掩隠しつ。

「あゝ寒い！」

男は肩を時てゝ直と彼に密添へり。宮は猶黙して歩めり。

「あゝ寒い！」

宮は仍答へず。

「あゝ寒い!!!」

彼は此時始めて男の方を見向き、
「如何したの。」

「あゝ寒い。」

「あら可厭ね、如何したの。」

「寒くて耐らんから其中へ一處に入れ給へ。」

「何の中へ。」

「シオールの中へ。」

「可笑い、可厭だわ。」

男は逸早く彼の押へしシオールの片端を奪ひて、其中に身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑ひて、

「あら貫一さん、是ぢや切なくて歩けやしない。あゝ、前面から人が来てよ。」

怒る、戯を作して憚らず、女も爲すまゝに信せて咎めざる彼等の關係は抑も如何。事情ありて

十年來鳴澤に寄寓せる此の間貫一は、今年の夏大學に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人なり。

第三章

間貫一の十年來鳴澤の家に寄寓せるは、怙る所無くて養はるゝなり。母は彼の幼かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中學を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆の中に父を葬ると與に、己が前途の望をさへ葬らざる可からざる不幸に遭へり。父在りし日さへ月謝の支出の血を絞るばかりに苦しき瘦世帯なりけるを、當時彼尙十五歳ながら間の戸主は學ぶに先ちて食ふべき急に迫られぬ。幼き戸主の學ぶに先ちては食ふべき急、食ふべきに先ちては葬すべき急、猶之に先ちては看護醫藥の急あ

りしにあらずや。自活すべくもあらぬ幼き者の如何にして是等の急を救得しか、固より貫一が力の能ふべきにあらず、鳴澤隆三の身一個に引承けて萬端の世話せしに因るなり。孤兒の父は隆三の恩人にて、彼は聊か其舊徳に報ゆるが爲に、啻に其病めりし時に扶助せしのみならず、常に心着けては貫一の月謝をさへ間支辨したり。慙くて貧乏父を亡ひし孤兒は富める後見を得て鳴澤の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるに其短き生時を以て慚らず思ひければ、左右は其忘形見を天晴人と成して、彼の一日も忘れざりし志を繼がんとせるなり。

亡き人常に言ひけるは、苟くも侍の家に生れながら、何の面目ありて我子貫一をも人に侮らすべきや。彼は學士となして、願くば再び四民の上に立たしめん。貫一は不斷に此言を以て警められ、隆三は會ふ毎に亦此言を以て嘲たれしなり。彼は言ふ違だに無くて暴に致りけれども、其の常に口にせし所は明かに彼の遺言なるべきのみ。

然れば貫一が鳴澤の家に於ける境遇は、決して厄介者として陰に疎まれるゝ如き憂目に遭ふにはあらざりき。慈父の遺言などに生れたらんよりは、慙て在りなんこそ幾許か幸は多からんよ、と知る人は噂し合へり。隆三夫婦は實に彼を恩人の忘形見として疎ならず取扱ひけるなり。然ばかり彼の愛せらるゝを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせむとすならんと想へる者もありしかど、當時彼等は構へて然る心ありしにはあらざ

りけるも、彼の篤學なるを見るに及びて、漸く其心は出で来て、彼の高等中學校に入りし時、彼等の了簡は始めて定めぬ。

貫一は篤學のみならず、性質も直に、行も正しかりければ、此人物を以て學士の冠を戴かんに、誠に権易からざる婿なるべし、と夫婦は私に喜びたり。此身代を譲られたりとて、他姓を冒して得謂はれぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑しと爲ざる所なれども、美しき宮を妻に爲るを得ば、此身代も屈辱も何か有らんと、彼はなかく夫婦に増したる權を懷きて、益學問を勵みたり。宮も貫一をば憎からず思へり。然れど恐くは貫一の思へる半には過ぎざらん。彼は自ら其の嗜好を知ればなり。世間の女の誰か自ら其の嗜好を知らざるべき、憂ふる所は自ら知るに過るに在り。謂ふ可くんば、宮は己が美しさの幾何値するかを當然に知れるなり。彼の美しさを以てして纏に簡程の資産を嗣ぎ、類多き學士風情を夫に有たんは、決して彼が所望の絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤より出でし、例寡からざるを見たり。又は富人の醜妻を厭ひて、美しき妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のまゝなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。尙彼は色を以て富貴を得たる人たちの若干を見たりしに、其容の己に如かざるものゝ多きを見出せり。剩へ彼は行く所に其美しさを唱はれざるはあらざりき。尙一件最も彼の意を強うせし事あり。それは彼が十七の歳に起りし事なり。當時彼は明治音樂院

に通ひたりしに、ワイオリソのプロフエツサアなる獨逸人は彼の愛らしき袂に艶書を投入しぬ。是素より仇なる戀にはあらで、女夫の契を望みしなり。殆ど同時に、院長の某は年四十を踰えたるに、先年其妻を喪ひしをもて再び彼を娶らんとて、密に一室に招きて切なる心を打明かせし事あり。

此時彼の小き胸は破れんとするばかり轟けり。半は曾て覺えざる可羞の爲に、半は遽に大なる希望の宿りたるが爲に。彼は茲に始めて己の美しさの寡くとも奉任以上の地位ある名流を其夫に直ひすべきを信じたるなり。彼を美しと見たるは彼の教師と院長とのみならず、醜を隣れる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらざり。

若彼のプロフエツサアに添はんか、或は四十の院長に従はんか、彼の榮譽ある地位は、學士を婿にして鳴澤の後を嗣ぐの比にはあらざらんをと、一旦抱ける希望は年と共に太りて、彼は始終畫ながら夢みつゝ、今にも貴き人又は富める人又は名ある人の己を見出して、玉の輿を昇せて迎に來るべき天縁の、必ず廻らんことを信じて疑はざりき。彼の然までに深く貫一を思はざりしは全く之が爲のみ。然れども決して彼を嫌へるにはあらず。彼と添はる有繋に樂しからんとは念へるなり。如此く決定に其とは無ければ又有りとし見ゆる帶木の好運を望みつゝも、彼は怠らず貫一を愛して居たり。貫一は彼の己を愛する外には其の胸の中に何もあらじとのみ

思へるなりけり。

第四章

漆の如き闇の中に貫一の書齋の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午後四時より向島の八百松に新年會ありとて未だ還らざるなり。

宮は奥より手ラムプを持ちて入來にけるが、机の上なる書燈を點し了れる時、婢は臺十能に火を盛りたるを持來れり。宮は之を火鉢に移して、

「而して奥のお鐵瓶も持つて來ておくれ。あゝ、もう彼方は御寢になるのだから。」

久しく人氣の絶えたりし一間の寒は、今俄に人の溫き肉を得たるを喜びて、直ちに咬まんとするが如く膚に薄れり。宮は慌忙しく火鉢に取附きつゝ、目を擧げて書棚に飾れる時計を見た

り。夜の闇く靜なるに、燈の光の獨り美しき顔を照したる、限無く艶なり。松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさへしたれば、露を帯びたる花の梢に月のうつろへるが如く、背後の壁に映れる黒き影さへ香滴るゝやうなり。

金剛石と光を爭ひし目は惜氣も無く睜りて時計の秒を刻むを打目成れり。火に翳せる彼の手を見よ、玉の如くなり。然らば友禪模様の紫縮緬の半襟に頼まれたる彼の胸を想へ。其の胸の中に彼は今如何なる事を思へるかを想へ。彼は憎からぬ人の歸來を待侘ぶるなりけり。

一時又寒の太甚しきを覺えて、彼は時計より目を放つと與に起ちて、火鉢の對面なる貫一が煙の上に座を移せり。筒は彼の手に縫ひしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今夜彼の敷くなり。

若やと聞着けし車の音は漸く近きて、益轟きて、竟に我門に停りぬ。宮は疑無しと思ひて起たとする時、客はいと酔ひたる聲して物言へり。貰一は生下戸なれば嘗て酔ひて歸りし事あらざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂んとす。

門の戸引啓けて、酔ひたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何事とも分かず唯慌てゝラムプを持ちて出でぬ。臺所より婢も、出合へり。

足の踏所も覺束無げに酔ひて、帽は落ちなん
ばかりに打頓うちどき、ハンカチフに裏みたる折を
左に繋つげて、山車人形のやうに揺々ゆゑと立てるは
貫一なり。面は今にも破れぬべく紅に熱して、
舌の乾くに堪へかねて連に空唾を吐きつゝ、

「遅かつたかね。さあ御土産です。還つて之を細君に遺る。何ぞ仁なるや。」

「まあ、大變酔つて！如何したの。」

「酔つて了つた。」

「あら、貫一さん、這麼所に寐ちや困るわ。さあ、早くお上りなさいよ。」

「慙う見えても靴が脱げない。あゝ酔つた。」

仰様に倒れたる貫一、脚を掻抱きて、宮は辛くも其靴を取去りぬ。

「起きる、あゝ、今起きる。さあ、起きた。起

きたけれど、手を牽いてくれなければ僕には歩
けませんよ。」

宮は婢に燈を把らせ、自らは貫一の手を牽かんとせしに、彼は跟きつゝ肩に縋りて遂に放さざりければ、宮は其の身一つさへ危きに、やうやう扶けて書齋に入りぬ。

柵の上に昇下されし貫一は頰るゝ體を机に支へて、打仰ぎつゝ微吟せり。

「君に驚む。金縷の衣を惜む莫れ。君に驚む。須く少年の時を惜むべし。花有り折るに堪へなば直に折る須し。花無きを待つて空しく枝を折ること莫れ。」

「貫一さん、如何して那樣に酔つたの？」
「酔つてゐるでせう、僕は。ねえ、宮さん、非常に酔つて居るでせう。」

「酔つて居るわ。苦しいでせう。」

「然、苦しいほど酔つて居る。這處に酔つて居るに就いては大いに譯が有るのだ。而して又宮さんなるものが大いに介抱して可い譯が有るのだ。宮さん！」

「可厭よ、私は、那樣に酔つて居ちや。不斷嫌ひな癖に何故那樣に飲んだの。誰に飲されたの。端山さんだの、荒尾さんだの、白瀬さんだのが附いて居ながら、酷いわね、這麼に酔して。十時には屹度歸ると云ふから私は待つて居たのに、もう十一時過ぎよ。」

「本當に待つて居てくれたのかい、宮さん。
 謝、多謝！ 若其が事實であるならばだ、僕
 は此儘死んでも恨みません。這麼に醉されたの

「も、實は其なのだ。」
彼は宮の手を取りて、情に堪へざる如く握緊にぎりしめめつ。

「二人の事は荒尾より外に知る者は無いのだ。荒尾が又決して喋る男ぢやない。其が如何して知れたのか、衆みんが知つて居て……僕は實に驚いた。四方八方から祝盃だくと、十も二十も一度に猪口を差されたのだ。祝盃などを受ける覺おぼは無いと言つて、手を引籠めて居たけれど、なかなか衆みん聴きこかないぢやないか。」

宮は竊に笑を帶びて餘念なく聴き居たり。かりそめ

「それぢや祝盃の主意を變へて、假初にも那云ふ美人と一所に居て寢食を俱にすると云ふのが既に可羨しい。そこを祝すのだ。次には、君も男兒なら、更に一步を進めて、妻君に爲るやうに十分運動したまへ。十年も一所に居てから、今更人に奪られるやうな事があつたら、獨り間貫一一個人の恥辱ばかりではない、我々朋友全體の面目にも關する事だ。我々朋友ばかりではない、延いて高等中學の名折にもなるのだから、是非彼美人を君が妻君にするやうに、是は我々が心を一にして結の神に禱つた酒だから、辭退するのは禮でない。受けなかつたら却つて神罰が有ると、弄譚とは知れて居るけれど、言草が面白かつたから、片端から引受けて呷々遣付けた。

宮さんと夫婦に成れなかつたら、はゝゝゝゝゝゝ高等中學の名折になるのだと。恐入つたものだ。何分宜しく願ひます。」

「可厭よ、もう貫一さんは。」

「友達にも然う知れて見ると、立派に夫婦にならなければ、彌平僕の男が立たない義だ。」

「もう極つて居るものを、今更……。」

「然うでないです。此頃翁さんや嬢さんの様子を見るのに、如何も僕は……。」

「那樣事は決して無いわ、邪推だわ。」

「實は翁さんや嬢さんの了簡は如何でも可い、宮さんの心一つなのだ。」

「私の心は極つて居るわ。」

「然うか知らん？」

「然うか知らんて、それぢや餘りだわ。」

貫一は醉を支へかねて宮が膝を枕に倒れぬ。

宮は彼が火の如き頬に、額に、手を加へて、

「水を上げませう。あれ、又寐ちや……貫一さん、貫一さん。」

寔に愛の潔き哉、此時は宮が胸の中にも例の汚れたる希望は跡を絶ちて、彼の美しき目は他

に見るべきものゝあらざらんやうに、其の力を貫一の寐顔に鍾めて、富も貫きも、乃至有ゆる

利慾の念は、其の膝に覺ゆる一團の微温の爲に溶されて、彼は唯妙に香しき甘露の夢に酔ひて

前後をも知らざるなりけり。

諸の可忌しき妄想は此の夜の如く眼を閉ぢて、此一間に彼等の二人よりは在らざる如く、

彼は世間に別人の影を見ずして、又此の明なる燈火の光の如きものありて、特に彼等をのみ照

すやうに感ずるなり。

第五章

或日笑輪の内儀は思も懸けず訪来りぬ。其娘のお俊と宮とは學校朋輩にて常に往來したりけれども、未だ家と家との交際にはあらざるなり。

彼等の通學せし頃さへ親々は互に識らで過ぎたりしに、今は二人の往來も漸く疎くなりけるに及びて、俄に其母の來れるは、如何なる故にか

と宮も兩親も怪しき事に念へり。

凡そ三時間の後彼は歸行きぬ。

先に怪しみし家内は彼の來りしよりも其用事の更に思懸けざるに驚けり。貫一は不在なりしかば此の珍しき客來のありしを知らず、宮も亦敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。

其日より宮は少しく食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮は逾告げんとは爲ざりき。

此間に兩親は幾度と無く談合しては、其事を決しかねて居たり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因もあらねど、片時も其目の忘れざる宮の様子の常に變れるを見出さんには難き事にあらず。然も無かりし人の顔の色の遽に光を失ひたるやうにて、

振舞など別けて力無く、笑ふさへいと打濕りたるを。

宮が居間と謂ふまでにはあらねど、彼の簞笥手道具等置きたる小座敷あり。此には火燵の爐を切りて、用無き人の來ては送に冬籠する所に

も用ゐる。彼は常に此に居て針仕事するなり。

倦めば琴をも弾くなり。彼が手玩と見ゆる狗子柳のはや根を弛み、眞の打傾きたるが、鯨切の水に埃を浮べて小机の傍に在り。庭に向へる

舷窓の明きに數紙を披けて、宮は膝の上に紅絹の引解を載せたれど、針は持たで、懶げに火燵に靠れたり。

彼は少しく食して多く眠らずなりてよりは、好みて此一間に入りて、深く物思ふなりけり。

兩親は仔細を知れるにや、此様子を怪しまんと

もせで、唯彼の爲すまゝに委せたり。

此の日貫一は授業始の式のみにて早く歸來にけるが、下座敷には誰も見えで、火燵の間に宮の咳け聲して、後は靜に我が歸りしを知らざる

よと思ひければ、忍足に窺寄りぬ。襖の僅に啓きたる隙より差覗けば、宮は火燵に倚りて硝子障子を眺めては俯目になり、又胸痛きやうに仰

ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美しき目を隠るは、何をか思案するべし。人の窺ふと知らねば、彼は口もて訴ふるばかりに

心の苦悶を其狀に顯して憚らざるなり。

貫一は異みつゝも息を潜めて、猶彼の爲んやうを見んとしたり。宮は少時ありて火燵に入りけるが、遂に櫓に打俯しぬ。

柱に身を倚せて、斜に内を窺ひつゝ貫一は眉を蹙めて思惑へり。

彼は如何なる事ありて然ばかり案じ煩ふならん。然ばかり案じ煩ふべき事を如何なれば我に

明さざるならん。その故のあるべく覺えざると

與に、案じ煩ふ事のあるべきをも彼は信じ得ざるなりけり。

「又案じ煩へる彼の面も自ら俯きぬ。間はずして知るべきにあらずと思定めて、再び内を差覗きけるに、宮は猶打俯して居たり。何時か落ちけむ、蔦縋の櫛の零れたるも知らず。

人の氣勢に驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既に其傍に在り。彼は慌てゝ思煩るゝ氣色を蔽はんとしたるが如し。

「あゝ、吃驚した。何時御歸んなすつて。」

「今歸つたの。」

「然う。些も知らなかつた。」

宮はおのれの顔の頬に眺めらるゝを眩ゆがりて、

「何を那樣に視るの、可厭、私は。」

然れども彼は猶目を放たず、宮は故と打背きて、裁片疊の内を撈せり。

「宮さん、お前さん如何したの。えゝ、何處か不快のかい。」

「何ともないのよ。何故？」

「慙く言ひつゝ益々急に撈せり。貫一は帽を冠りたるまゝ火燵に片肘掛けて、斜に彼の顔を見遣りつゝ、

「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。然う言へば、直に疑深い、神経質だと言ふけれど、それに違無いちやないか。」

「だつて何ともありもしないものを……。」
「何ともないものが、惘然考へたり、太息を吐いたりして鬱いで居るものか。僕は先之から唐

紙の外で立つて見て居たんだよ。病氣かい、心配でもあるのかい。言つて聞したつて可いちやないか。」

「宮は言ふ所を知らず、纔に膝の上なる紅絹を手弄るのみ。

「病氣なのかい。」

彼は僅に頭を掉りぬ。

「それぢや心配でもあるのかい。」

彼は仍頭を掉れば、

「ぢや如何したと云ふのさ。」

宮は唯胸の中を車輪などの廻るやうに覺ゆるのみにて、誠に亦許にも言を出すべき術を知らざりき。彼は犯せる罪の終に秘む能はざるを悟れる如き恐怖の爲に心慄けるなり。如何に答へんとさへ惑へるに、傍には貫一の益詰らんと待つよと思へば、身は挫らるゝやうに迫來る息の隙を、得も謂はれず冷かなる汗の流れくぬ。

「それぢや如何したのだと言ふのに。」

貫一の聲は漸く苛立ちぬ。彼の得言はぬを怪しと思へばなり。宮は驚きて不覺に言出せり。

「如何したのだから私にも解らないけれど、……私は此二三日如何したのだから……變に色々な事を考へて、何だか世の中が滿らなくなつて、唯悲しくなつて來るのよ。」

呆れたる貫一は瞬もせず耳を傾けぬ。

「人間と云ふものは今日慈して生きてゐても、何時死んで了ふか解らないのね。慈して居れば、可樂な事もある代に辛い事や、悲しい事や、苦しい事なんぞが有つて、二つ好い事は無し、考れば

考へるほど私は世の中が心細いわ。不圖然う思出したら、毎日那樣事ばかり考へて、可厭な心地になつて、自分でも如何か爲たのか知らんと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」

目を閉ぢて聽居し貫一は徐に眶を開くと與に眉を顰めて、

「それは病氣だ。」

宮は打萎れて頭を垂れぬ。

「然し心配する事は無いさ。氣に爲ては可かんよ。可かい。」

「えゝ、心配しはしません。」

異しく沈みたる其聲の寂しさを、如何に貫一は聴きたりしぞ。

「それは病氣の所爲だ、腦でも不良のだよ。那樣事を考へた日には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固より世の中と云ふものは然う面白い義のものぢやないので、又人の身の上ほど解らないものは無い。其は其に違無いのだけれど、衆が皆那樣了簡を起して御覽な、世の中御寺ばかりになつて了ふ。儂いのが世の中と覺悟した上で、その儂い、滿らない中で切ては樂を求めやうとして、究竟我々が働いて居るのだ。考へて鬱いだ所で、滿らない世の中に儂い人間と生れて來た以上は、どうも今更爲方が無いぢやないか。だから、滿らない世の中を幾分か面白く暮さうと考へるより外は無いのさ。面白く暮すには、何か樂が無ければならない。一事慈と云ふ樂があつたら決して世の中は滿らんものではないよ。宮さんはそれでは樂と云ふ